

鹿児島県における青少年育成に関わる社会教育計画の評価 ー鹿児島県立青少年研修センターによる「生きる力」を育む体験活動プログラムを通してー

久保田 治助 [鹿児島大学教育学系(地域社会教育)]

田 島 悦 子 [鹿児島県立青少年研修センター]

中 村 浩 一 [鹿児島県立青少年研修センター]

狩 集 淳 [鹿児島県立青少年研修センター]

Evaluating the social education plan regarding the development of young people in Kagoshima prefecture:
Through the experiential activity program to foster "The Zest for Living" by the Kagoshima Prefectural
Youth Training Center

KUBOTA Harusuke, TABATA Etsuko, NAKAMURA Koichi and KARIATSUMARI Jun

キーワード：社会教育計画、社会教育評価、青少年育成、体験活動、学校地域連携

1. はじめに

本研究の目的は、これまで青少年育成事業における社会教育計画の評価にあたり、学習指導要領で示されている学校と地域に着目し、教育計画と連動した青少年教育計画のもと教育評価を構築することにある。特に、青少年育成に関する社会教育活動の教育評価を構築するにあたり、鹿児島県立青少年研修センター(以後：青少研)が企画実施した「「生きる力」を育む夏休みワクワクプラン」をもとに検証を行った。この青少研の企画は、鹿児島県立青少年研修センターと鹿児島大学の連携で行われた事業として「「生きる力」を育む体験活動プログラムの開発」という研究テーマのもと2015年から3か年に渡って実証研究のもとに作られたものである。

研究の手順としては、1年次「事業の趣旨・目標の明確化と活動内容の設定」、2年次「支援・指導方法の工夫・改善」、3年次「評価方法の工夫・改善」である。特に3年間の実証分析のなかでも、本研究のテーマである社会教育計画プログラムの評価方法の開発を行った3年次に焦点を当て検討している。

2015年12月に中央教育審議会において、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方」について答申がなされた。鹿児島県においても、かごしま学校応援団促進事業や地域で支える家庭教育推進事業、コミュニティ・スクールの導入など、学校と連携・協同し、地域全体で子供を守り育てる環境づくりが進められている。このような中、社会教育施設においても、児童生徒の「生きる力」の育成に向け、学校教育との連携を深めながら、主催事業のプログラムやアクティビティの内容を研究していくことが急務である。これまで青少研では、平成25年度から2年間にわたり、「より深い感動を味わう体験活動プログラムの開発」という研究テーマを設定して取り組んできた。子供たちがより深い感動を味わう体験活動プログラムの開発についての基本的な考え方、目標の設定や活動プログラムの内容設定の考え方等が明らかとなった。しかし、以下の2点の課題が挙げられた。①生きる力の育成を総合的に図るためには、これまでの「豊かな人間性」や「健康・体力」の育成に関する活動プログラムに加え、「確かな学力」についての視点

も加えた活動プログラムを構築する必要がある。②長期の宿泊研修に伴い、基本的な生活習慣の定着についての取組を見直すことで、更に生きる力を育むことができる。そこで、平成27年度から、青少研では、本事業を研究対象の中心に位置付け、児童生徒に「生きる力」を育むための体験活動プログラムの開発を3年間の計画で進めている。最終年度の平成29年度は、本研究の3年目であり、2年間の研究の成果と課題を踏まえつつ、評価方法の工夫と改善について取り組んだ。

2. 青少年期における社会教育計画の先行研究

青少年育成に関する社会教育計画の変遷について概観すると、青少年教育が学校教育と地域社会（社会教育）の連携としての位置付けは、これまで曖昧であった。青少年教育については、今西幸蔵が、「社会教育を進めるにあたって、現代の子どもの生活や意識の変化に対応することが必要であり、そのためには子どもだけでなく親はもちろんのこと地域住民も一緒に参加できるような社会教育プログラムが望まれている」と指摘し、「学校や地域社会と一体となった学習活動が社会教育場においても積極的に取り組まれることが重要となる」と述べているように、学校教育のなかで青少年育成についての理解を深める必要がある¹。近年では、『月刊公民館』²において国立青少年教育振興機構の取組の特集として全国の青少年自然の家の実践活動について述べられている。しかし、社会教育計画を代表する今西幸蔵『社会教育計画ハンドブック』（2004年）、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育計画ハンドブック』（2009年）、辻浩・片岡了編著『自治の力を育む社会教育計画』（2014年）などについて見ても、社会教育計画の理論と実践の概要について論じられているものの、青少年教育実践の詳細な社会教育計画方法の検討がなされているとは言い難い。そこで、国立青少年教育振興機構での「自然体験に関わる指導者養成カリキュラムに関する調査研究」³試案を参考にし、社会教育計画を立案した上で、本企画のアンケート結果の分析をもとに、社会教育計画の教育評価について検討を行った。

3. 研究の実際

3.1 「生きる力」を育む体験活動プログラムの開発

本事業は、現代の教育的課題である学力向上や基本的な生活習慣の定着を視野に入れながら、「知・徳・体の調和が取れ、主体的に考え行動する力を備え、生涯にわたって意欲的に自己実現をめざす人間」を育成するプログラムとして企画・実施したものである。さらに、将来教員を目指す大学生に対して、プログラムの企画・実施や学習指導の実践の場としてもらうために、鹿児島大学教育学部地域社会教育専修との連携事業として位置付け、企画・実施した。

3.2 研究方法

本研究主題に迫るために、以下の3つの視点から研究内容を設定し、取り組んでいくこととした。

①事業の趣旨・目標の明確化と活動内容の設定である。事業の趣旨及び目標に応じた適切な活動プログラムを設定するために、各アクティビティのねらいや効果を明確にするとともに、各々のアクティビティの関連も吟味しながら活動プログラムを構築し、実践を通してその妥当性や有効性を検証する。②支援・指導方法の工夫・改善である。設定した活動内容を効果的に体験させるための支援・指導方法の工夫・改善を行う。一つ一つのアクティビティに応じた指導者側の手立てを具現化し、その妥当性や有効性を検証する。③評価方法の工夫・改善である。評価方法について工夫・改善を行う。子供たちの実態を捉えるための診断的評価、活動の状況を基に次の指導に生かす形成的

評価、子供の自己評価、相互評価等の妥当性や有効性を検証する。

3.3 3年次の研究（視点「評価方法の工夫・改善」）

3年次は、1・2年次の研究の成果と課題を踏まえ、次の3事業で①診断的評価と形成的評価、②自己評価と相互評価、③総括的評価について実践していった。

事業名	主な研究
生きる力を育む夏休みわくわくプラン	<ul style="list-style-type: none"> ・ I K Rによる診断的・総括的評価（事業評価） ・ 文化創作活動（昆虫クラフト）における形成的評価 ・ 野外活動（協力ゲーム）における形成的評価 ・ 基本的な生活習慣（生活の時間）における形成的評価 ・ 基本的な生活習慣に係る自己評価・相互評価
悠遊学舎「ふるさとを歩いて学ぶ50キロ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ I K Rによる診断的・総括的評価（事業評価） ・ 自己評価・相互評価
青少研「郷土を学び隊」	<ul style="list-style-type: none"> ・ I K Rによる診断的・総括的評価（事業評価） ・ 自然散策活動における形成的評価 ・ 自己評価・相互評価

3.3.1 評価に関する基本的な考え方

評価全般	社会教育における評価
I 教育評価の目的 1 学習者のため 学習者に学習の到達程度の情報を与えることを目的とする 2 指導者のため 教師＝教授者が指導のための資料を得ることを目的とする 3 管理目的や研究目的 (1) 教育行政のための資料としての評価（教委や文科省の学力調査など） (2) 学校の管理・運営の資料としての評価 (3) 保護者の参考にするための評価 (4) 子供の処遇決定のための評価（資格認定、振り分け、選抜） (5) カリキュラム改善のための評価 II 評価の方法 基準による区別 1 相対評価 他人と比べる評価方法 学習者の属する集団（学年・性別・年齢など）の成績水準（平均点・平均到達度・正答率など）に基づき、個人の成績を解釈する（＝位置付ける、順位付ける）評価方法 2 到達度評価（絶対評価） 教育目標への到達程度による評価法 3 個人内評価 その個人自身と比べる評価 III 評価の方法 実施段階による区別 1 診断的評価 前もって学習者の実態を把握しそれに合わせた指導計画を立てるための評価 2 形成的評価 学期や単元の途中で出される評価 3 総括的評価 学期や単元の最後に行う評価	社会教育の評価は、教育そのものの評価や学習の評価が中心である。その他にも、社会教育の行政・経営・運営の評価、施設や団体の評価等もあり、それぞれ独自の側面はあるが、それらは教育や学習の向上を図ることを目指しているから、その決め手となるのは教育や学習の評価である。 一般に教育という場合には、社会教育だけではなく学校教育その他の教育も含まれる。そのような教育の評価は、教育目標の達成度を確認するために行われる。 一方、学習の評価は、個々の学習者がそれぞれの学習目標をどの程度達成したかを確かめればよいのであるから、個々の学習者に即して行われるが、集団学習の場合には、その集団全体の学習評価も行われる。 〈学習評価の目的〉 a 学習プログラムの作成者がプログラムの改良をはかるため。 b 学習者がみずからの学習の向上をはかるため。 c 社会、集団、個人が学習成果を活用しうるようにするため。 〈学習評価の機能〉 ア 学習プログラムの改善に役立つような、プログラム効果やそのプログラムに関する学習者のレディネス等についての資料を提供する。 イ 学習者が学習の方向を修正したり、学習法を改善するための資料を提供する。 ウ 学習の励みになったり、学習者を勇気づけたりする。 エ 学習者が職業上の選択をしたり、社会参加をしたりする際の資料を提供する。 オ 社会や企業等が人材を採用したり、活用したりする際の資料を提供する。 「社会教育計画ハンドブック（H21 国立教育政策研究所）より抜粋」

3.3.2 本研究における評価

本研究においては、社会教育施設における評価の主目的であるプログラム改良に重きを置き、I K R アンケートを中心に評価を行う。評価方法については以下のとおりである。

(1) 診断的評価の工夫・改善

参加決定通知とともに、事前アンケートとして以下の2点を記録し、事業時に持参してもらうこととし、事業前の実態を見取る資料とする。① I K R アンケート（事前）、② 基本的な生活習慣アンケート（事前）聞き取り【保護者】、の2点である。

(2) 形成的評価の工夫・改善

活動の始まりには、活動の目的を子供たちと確認することで目標の明確化を図り、子供たちが意欲的に活動に臨めるようにする。活動中には、全職員で細やかに個々の活動状況を見取り、個に応じた適切な指導が行えるようにする。そのために、事前に予想される子供のつまづきに対する支援

診断的評価		自己評価・相互評価		総括的評価	
事業	事前	事中	事後		
生きる力を育む 夏休みわくわく プラン	I K R アンケート 子供の基本的な生活習慣 についての聞き取り（保 護者）	・生活記録ノート ・振り返りシート	I K R アンケート ・総合アンケート	I K R アンケート（追 跡調査）	
悠遊学舎「ふる さとを歩いて学 ぶ五〇*」	I K R アンケート 子供の基本的な生活習慣 についての聞き取り（保 護者）	・生活記録ノート	I K R アンケート ・総合アンケート		
青少研 「郷土を学び 隊」	I K R アンケート	・振り返りシート ・観察カード	I K R アンケート ・総合アンケート		
指導者の関わり	※活動に対する子供の反 応の想定と個に応じた 手立ての構想	・活動目標の確認の場 ・活動中の見取りと子供の支援、指導 ・振り返りの場	※複数の指導者から見た事業記録に基 づいたアンケートの分析と総括		

の仕方を資料として配布し、全職員が積極的に子供を見取り、評価・指導する体制作りを行う。活動中や活動後は、各職員が気付いた子供のつまずきや良い点を全職員で情報共有することで、次の指導・評価に生かせるようにする。

(3) 子供による自己評価、相互評価の工夫・改善

活動中に子供自身が個々に自己評価を行うことで、目標達成につながるように、目的を意識させる声かけを積極的に行っていく。活動の最後には、必ず振り返りの時間を取り、グループ内でのシェアリングと全体での発表による相互評価を行うこととする。その中で、個々の見方・考え方・感じ方がどのように変わったかを振り返ることができるような投げかけを行い、子供の思考を広げるようにする。また、指導者として、子供の変容を評価し、次の活動に生かせるようにする。

(4) 総括的評価の工夫・改善

事業終了後の事後アンケートとして、以下の4点を行い、事前アンケートからの変容を見取る資料とする。① I K R アンケート（事後）、②各活動プログラムについての子供の感想、③センター職員による事業記録【職員】、④ I K R アンケート（事後）と各活動プログラムについての子供の感想は、事業終了後すぐに行い、ねらいが達成できているかを見取る資料とする。センター職員による事業記録は、職員の手立ての妥当性・有効性を捉えるための事業記録とする。

(5) I K R アンケート調査について

I K R アンケート調査は全部で28項目あり、「いやなことは、いやとはっきり言える」といった心理的社会的能力（14項目）、「自分かってな、わがままを言わない」といった道徳的能力（8項目）、「早寝早起きである」といった身体的能力（6項目）の3つの能力で子供たちの「生きる力」を測定する。

回答は、質問項目ごとに「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階（数字6～1）に○印をひとつ付けるだけで、短時間で簡単に調査することができる。

4. 3年次の実践事例

4.1 事例概要

①趣旨、小学5年生から中学3年生までの児童生徒を対象に、異年齢集団での共同生活を通して、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康体力」及び「基本的な生活習慣」など「生きる力」を育成

する。②期日、平成 29 年 8 月 6 日（日）～平成 29 年 8 月 11 日（金）（5 泊 6 日）、事前研修会は平成 29 年 7 月 16 日（日）。③会場、県立青少年研修センター。④対象者、小学 5 年生～中学生。⑤募集人員、50 人（応募者多数の場合は、学年性別を考慮の上、抽選により決定する）⑥日程、当日は台風接近の為日程を短縮して実施。⑦参加者実数、50 人。

	8 月 6 日(日)	8 月 7 日(月)	8 月 8 日(火)	8 月 9 日(水)	8 月 10 日(木)	8 月 11 日(金)
【研修Ⅰ】 9:30～12:00	開会行事	③ 野外協力ゲーム	⑥ 大学生との交流	⑨ オリエンテーリング	⑫ 大学生との交流	⑮ 研修のまとめ
【研修Ⅱ】 13:30～16:00	① レクリエーション	④ グループワーク トレーニング	⑦ 自主学習	⑩ 昆虫クラフト	⑬ 野外炊事	⑯ 体験発表会 閉会行事
【研修Ⅲ】 19:20～20:50	② 自主学習	⑤ 自主学習	⑧ 星空観望	⑪ 自主学習	⑭ キャンプファイヤー	

4.2 野外活動（トレジャーハントゲーム）

4.2.1 昨年度の反省から

昨年度は、長時間にわたる自然散策等の機会を設定し、自然の美しさ、雄大さ、神秘性、厳しさなどの直接人間の五感に働きかけ、研修生の感性を育み、知的好奇心や探究心を育むことを念頭に事業を行い一定の成果を得ることができた。しかし、活動時間が長いこともあり、子供たちの活動に対する意欲や安全上（事故防止）の意識を持続させることが難しく、活動の課題として上げられた。今回は、グループでの話し合い活動や K Y T 等、事前準備の活動を充実させ、自然の中での様々な活動の実践・反復を通じて、知識や技術を単なる理解としてではなく、生活の知恵として身に付けることを意識し、活動を展開していきたい。

4.2.2 活動のねらい（◎主観点：健康・体力、○副観点：豊かな人間性）

◎ 研修センター内のフィールドを探索する活動を通して、安全に留意し、自然に親しみながら、自己の体力の向上を図るようにする。【**体づくり**】

○ ゲームを通して互いに関わり合う中で、集団の中での自分を見つめ、連帯感・協調性を高めながら、自立心、自己抑制力、責任感を持って活動に取り組むことができるようにする。【**共生・寛容**】

4.2.3 活動の実際（150 分）

過程	活 動	支援・◎○、※評価
導入 30 分	1 本時の活動内容と進め方を確認する。 ・トレジャーハントゲームの進め方 ・危険な動植物について ・指導者、トイレ、水道の確認 ・地図の見方、トレジャーハンティングワードの見方、指示書の使い方 ・ルール、時間、ペナルティー等の確認 2 野外活動の良さや意義について考える。（安全の確保 ⇒ K Y T）	・グループごとに着席する。 ・本時の進め方を確認する。（活動内容・時間・範囲） ○ 自然・環境の大切さにふれ、野山の歩き方（フィールドマナー）についても考えさせる。 ・ハチ、マダニ、毒蛇、虫、ハゼの木等への注意喚起を行う。 ○ 基本的な地図の見方や指示書の使い方を教える。 ◎ 班員が一緒に協力して、安全に留意しながら行動することを約束させる。 ※ K Y T により、班員で意見を出し合い、潜在的な危険に対して、事前に注意することができる。
展開 100 分	3 各班オリエンテーリングマップを受け取り、作戦を立てる。 4 一斉に出発する。 （グループでの活動：90 分） (1) スコアリングオリエンテーリング (2) トレジャーハントゲーム 5 出発地点に集合し、安全確認を行う。	◎ 班員全体の体力や体調等に配慮し、コース選択をおこなうよう指導する。 ・指導者間の連絡を密にし、安全確保と事故防止に努める。（競技中の激励や安全指導、必要に応じた誘導等） 【スコアリングオリエンテーリングとは】 地図をもとにポイントポストを探し、得点を競うゲーム。今回は、ポスト付近に 7 文字の暗号を設置し（コウカンホール）、ゲームへの興味を高める工夫を行う 【トレジャーハントゲームとは】 指示書に示された課題をグループで協力し、宝の隠し場所（3 か所）を探し出すゲーム ・参加者の点呼、健康状態の確認を行う。 ※ 安全に留意し、自然に親しみながら、自己の体力の向上を図ることができる。
終末 20 分	6 本時の活動を振り返る。 7 後片付けをする。	◎ 本時の活動で、各グループで工夫したことや協力できたことなどを発表し、学習成果を確認する。 ○ お互いの発表を聞いて、自分が果たした役割や、他者からの支援について振り返らせる。 ※ 班員で協力し、集団の中での自分を見つめ、連帯感・協調性を高めることができる

4.2.4 活動を振り返って（主に評価について）

成果としては、KYTを用いた事前指導を行うことで、身近なこととして潜在的危険の注意を喚起することができた。また、センター施設全体を活用したコース設定により、ダイナミックな野外散策活動が実施できた。

課題としては、県下様々な学校から参加していることもあり、チームとしての連携に課題を残すグループが見受けられた。グループに対する事前指導や話し合い活動の充実を図り、連帯感・協調性を高め、自立心、自己抑制力、責任感を持った活動に取り組める工夫が必要である。

4.3 昆虫クラフト

4.3.1 昨年度の反省から

子供一人一人がこだわりのある作品を作るためには、活動時間が足りなかった。発表会や感想記入などの時間を確保するためには、自分の作りたい昆虫を決める作業や材料を選ぶ時間など工夫が必要である。

4.3.2 活動のねらい（◎主観点：豊かな人間性、○副観点：確かな学力）

- ◎ 昆虫や樹木について関心をもち、自然の中で意欲的に観察・採集を行うことを通して、自然のすばらしさや生命の多様性に気付くことができるようにする。〔感動・感性、生命・倫理〕
- 昆虫標本の観察を通して、昆虫の体の仕組みを知り、形や色、材料の特徴をいかした製作スケッチを作ることができるようにする。〔思考・判断、判断・表現〕

4.3.3 活動の実際（150分）

過程	活動	活動上の一般的な支援（・） 「生きる力」を育むための支援（◎○）
導入 10分	1 昆虫の部分写真・昆虫クラフトの作品を見て、活動への意欲をもつ。 2 本時の活動の内容を確認する。	・ 様々な部分写真や昆虫の作品を準備し、作りたいもののイメージがもてるようにする。 ○ 昆虫や材料の特性をいかした表現ができるよう心がけさせる。（木の実や枝の形、足の付き方、生息している場所など）
展開 110分	3 昆虫の標本や図鑑を見て、自分の作りたい昆虫を決める。 4 昆虫を観察し、作品を作る。 5 後片付けをする。	◎ 昆虫の標本を準備し、実物を見ながら自分の作りたい昆虫を決定することができるようにする。 ・ 学年に応じて、作りやすい昆虫を伝えるなど助言をする。 ○ 虫眼鏡を準備し、細かくワークシートに記入できるようにする。 ・ 虫眼鏡をグループ3個ずつ準備する。 ・ 剪定はさみやグルーガンなど、道具の安全な使い方について指導をする。 ◎ 体のつくりと生活環境の関係など、自然の中で生きていくための生き物の知恵等について考えられるよう、随時声かけを行う。 ○ 工夫した材料の使い方等を紹介し、それぞれの作品にいかせるようにする。
終末 30分	6 作品発表会をする。 ・ 個人の作品の紹介 ・ グループ ・ 全体 7 活動を振り返り、感想を記入する。	◎ 自由に作品を鑑賞する時間を取り、自分のお気に入りの一点を決めさせる。その際、良いと思った点を具体的に説明できるように声かけをする。 ◎ グループ内で自分の作品を紹介し、その中で選ばれた作品を全体で紹介する。 ◎ 自分の作品や友達の作品の良さに目を向けさせ、達成感や充足感を味わえるようにする。

4.3.4 活動を振り返って

成果としては、昆虫の体のつくりをじっくりと観察し、その生態や環境との関わりを考えると、昆虫と自分とのつながりや生き物の命の大切さなど感じ、これからも観察していきたい

と意欲をもたせることができた。事前に多様な材料を準備することで、発想に広がりが見られ、個性豊かな作品を作り上げることができた。

課題としては、昨年度同様、活動時間が足りなかった。発表会や感想記入などの時間を確保するためにも、材料を選ぶ時間や設計図を作製する時間等を前時に設けるなど時間配分に工夫が必要である。

4.4 職員マニュアル

社会教育実践はグループで指導を行うために、指導計画だけでなく、職員マニュアルとして、指導者が指導内容を共有する必要がある。上記の活動計画のもとに、職員用の指導マニュアルを作成した。

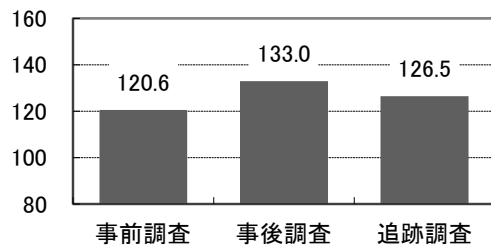
趣 旨	素朴で身近な自然素材を収集し、玩具や様々な作品を作る活動を通して、作品を作り上げる成就感を味わわせるとともに、自分で作ったもので遊んだり、生活を彩ったりする楽しさを理解させる。 自然の中にある素材に目を向けさせ、身近な物に対する豊かな感性を育てる。	
主なねらい	(1) 昆虫や樹木について関心を持ち、自然の中で意欲的に観察・採集を行うことを通して、自然のすばらしさや生命の多様性に気付くことができるようにする。〔感動・感性、生命・倫理〕 (2) 昆虫標本の観察を通して、昆虫の体の仕組みを知り、形や色、材料の特徴をいかした製作スケッチを作ることができるようにする。〔思考・判断、判断・表現〕	
対象者	小学5年生以上60人まで	
過 程	活 動	活 動 内 容
導 入 10 分	1 昆虫の部分写真・昆虫クラフトの作品を見て、活動への意欲をもつ。 2 本時の活動の内容を確認する。	・ 様々な部分写真や昆虫の作品を準備し、作りたいもののイメージがもてるようにする。 ○ 昆虫や材料の特性をいかした表現ができるよう心がけさせる。(木の実や枝の形、足の付き方、生息している場所など)
展 開 110 分	3 昆虫の標本や図鑑を見て、自分の作りたい昆虫を決める。 4 昆虫を観察し、作品を作る。 5 後片付けをする。	◎ 昆虫の標本を準備し、実物を見ながら自分の作りたい昆虫を決定することができるようにする。 ・ 学年に応じて、作りやすい昆虫を伝えるなど助言をする。 ○ 虫眼鏡を準備し、細かくワークシートに記入できるようにする。 ・ 虫眼鏡をグループ3個ずつ準備する。 ・ 剪定はさみやグルーガンなど、道具の安全な使い方について指導をする。 ◎ 体のつくりと生活環境の関係など、自然の中で生きていくための生き物の知恵等について考えられるよう、随時声かけを行う。 ○ 工夫した材料の使い方等を紹介し、それぞれの作品にいかせるようにする。
終 末 30 分	6 作品発表会をする。 ・ 個人の作品の紹介 ・ グループ ・ 全体 7 活動を振り返り、感想を記入する。	◎ 自由に作品を鑑賞する時間を取り、自分のお気に入りの一点を決めさせる。その際、良いと思った点を具体的に説明できるように声かけをする。 ◎ グループ内で自分の作品を紹介し、その中で選ばれた作品を全体で紹介させる。 ◎ 自分の作品や友達の作品の良さに目を向けさせ、達成感や充足感を味わえるようにする。
事前の 準備	団体引率者	作りたい昆虫を考えてくる。 必要な材料を集めてくる。 完成予想図(イメージ)を考えてくる。

5. I K R アンケート調査結果

事前・事後の調査結果を比較すると、すべての分野で得点平均値が向上した。また、事後と追跡調査結果を比較すると、すべての分野で低下しているが、事前調査結果との比較では向上している。

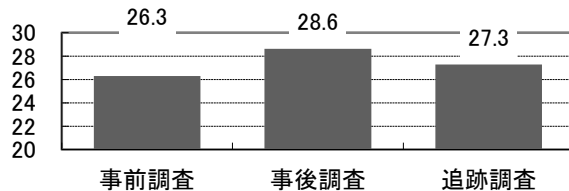
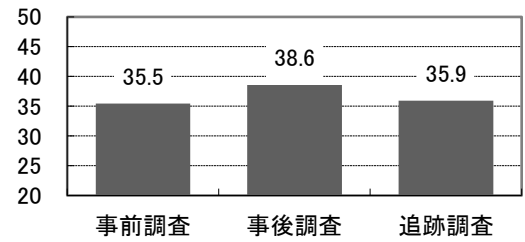
「生きる力」の変容

(得点範囲：28～168点)



「道徳的能力」の変容

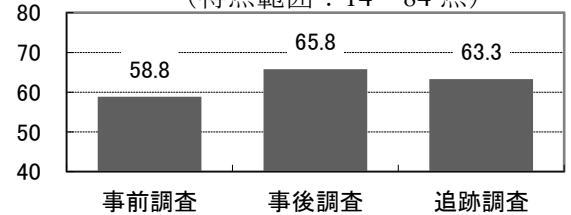
(得点範囲：8～48点)



「身体的能力」の変容 (得点範囲：6～36点)

「心理的社会的能力」の変容

(得点範囲：14～84点)



分野別にみると、「心理的社会的能力」においては視野・判断「先を見通して、自分で計画を立てられる」や「多くの人に好かれている」などの項目の向上が顕著である。このことは、事業中、スケジュールを確認しながら自分で考えて行動することを徹底したことが向上につながったと考えられる。また、交友・協調の項目が向上したことはグループ活動や個々の関わり方が良好で楽しく活動できたことが伺える。一方、「小さな失敗をおそれない」などの項目はあまり向上がみられないことから、他者への依存傾向が様々な場面で見られたことを裏付けていた。

「道徳的能力」においては、全ての項目がわずかに向上し、追跡調査では、ほぼ事前調査の得点に戻っている。つまり、道徳性の向上は一朝一夕には期待できないことであり、繰り返し様々な活動を体験する必要があることを示している。「身体的能力」においては、「洗濯機がなくても、手で洗濯できる」などの技能や身体的耐性の項目に向上がみられた。子供たちは、直接体験を通じて自信を持ち意欲的に活動できるようになったのではないかとと思われる。これらのことから、本事業での活動プログラムはそれぞれの能力を向上させるために効果的であり、子供たちの「生きる力」の育成にも有効である。

6. 成果や課題

6.1 診断的評価・総括的評価に関して

I K R アンケート、基本的な生活習慣に関する聞き取り調査を事業前と事業後に実施することで、子供の変容を見取ることができた。また、保護者が事業に対してどのような期待をしているのかを知ることができ、今後の事業構成に役立てられる資料となった。さらに、事業中のセンター職員による事業記録と事業後の各活動プログラムについての子供の感想をとることで、支援・指導方法の妥当性・有効性を捉えることができた。しかし、基本的な生活習慣に関する聞き取りや各活動プログラムについての子供の感想は、各活動プログラムの目標を明確化した上で、より具体的な評価項目の内容や項目数に見直しを行う必要があった。

6.2 形成的評価

事前につまずきやすい子供の姿を具体的に想定し、その子に対する対応策を位置付けることで、

各指導者の役割が明確化し、全員体制で個に応じた支援に当たることができた。また、各指導者が感じた子供の課題等の情報を全員で共有することで、次の指導に生かすことができた。しかし、個に応じた支援がより効果的にできるような対応策と体制作りを他事業の中でも実践し、職員のスキルアップを図っていく必要がある。

6.3 自己評価・相互評価

活動のはじめにねらいについて確認することで、活動の目的が焦点化され、活動中・活動後の自己評価、相互評価に生かされた。活動後に班内のシェアリングの場をもつことで、互いの良さに気付かせることができた。また、友達から賞賛されることで、自分の良さにも気付き、自信につなげることができた。しかし、事業のねらいを達成できるように、子供たちのねらいに対する意識を継続させることが不可欠である。そのために、評価の場を活動の最後だけでなく、複数回位置付け、活動過程のどこで、どのように評価をさせると効果的かを今後、検討していく必要がある。

7. 研究の成果

7.1 事業の趣旨・目標の明確化と活動内容の設定について

事業の趣旨・目標の明確化としては、本研究の中心事業である「『生きる力』を育む夏休みワクワクプラン」の趣旨・目標である「小学5年生から中学3年生までの児童生徒を対象に、異年齢集団での共同生活を通して、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康体力」及び「基本的な生活習慣」など「生きる力」を育成する」とは、具体的にどのようなことであり、この期の子供たちにとってどの程度達成できるようにすればよいかを分析し、目標を明確にすることができた。また、事業目標と活動プログラム及びアクティビティの結び付きを明らかにすることができた。活動内容の設定としては、活動プログラムの設定については、明確にした事業の趣旨・目標を基に、どのような活動領域からどのようなアクティビティを選択し、構成すればよいか、それらをどのような順序・配列で設定すれば、目標の達成にとって最も効果的・効率的かを明らかにすることができた。そのことにより、事業目標と活動内容の整合性を図ることができた。

7.2 評価方法の工夫・改善について

診断的評価、総括的評価としては、新たに開発したアクティビティの有効性及び事業全体の妥当性について、I K Rアンケート等を活用しながらより多面的に検証するとともに、事業全体の評価及び各活動プログラムの妥当性を検証することができた。形成的評価及び子供による自己評価・相互評価としては、次回の指導に活かす形成的評価の具体策として、実際の活動場面で指導者が子供の活動状況を的確に把握しながら、適切な指導助言が行えるように、実施細案の中に、つまずきやすい子供の姿を具体的に想定し、その子に対する対応策を位置付けることができた。そのことによって複数の指導者による指導体制で各指導者が役割を明確にして、的確な対応を行うことができた。さらに、子供による自己評価や相互評価についても、基本的な活動過程に対応させながら実施細案に位置付けて実施することができた。また、各活動プログラムにおいて、活動のねらいを確認させ、活動の見通しをもたせながら取り組ませるようにした。振り返りの場面で、めあてに対する自分の取組を振り返らせるとともに、自分以外の子供がどんな工夫をしていたのか、友達のがんばりを紹介する場を設定し、指導者がそれに対して賞賛や励ましを行いながら、活動をまとめ、次の活動へとつないでいくようにすることができた。

8. おわりにー研究の課題

以上、青少年育成に関する社会教育計画のプログラムの評価について、社会教育計画のカリキュラムと指導案の試案をもとに、実際の企画を実施するとともにアンケートを行い、評価方法について検討してきた。そのうえで、3つの課題が挙げられる。①事業の趣旨・目標の明確化と活動内容の設定として、本研究で行った事業の趣旨・目標の分析から事業目標を明確にし、その目標に基づいた適切な活動内容を設定するまでの事業企画・立案について、多くの事業でもこの手法を用いて、吟味・検討する必要がある。②支援・指導方法の工夫・改善としては、本研究で具現化し、実施・検証した基本的な活動過程、活動内容の設定、活動形態、場の設定、効果的な提示資料等の工夫・改善を受入指導事業やその他の自主企画事業にも反映させていく必要がある。そのためには、当センターで行っているすべての活動プログラムを集約した「職員指導マニュアル」に基づいた共通理解と共通実践を今後とも継続していくとともに、参加者にとってより分かりやすい指導用資料などをさらに充実・整備していく必要がある。③評価方法の工夫・改善としては、本研究で具現化した「診断的評価」「総括的評価」「形成的評価」「子供による自己評価・相互評価」などの手法を今後、受入指導事業やその他の自主企画事業にも反映させながら、評価研究をさらに深める必要がある。

近年、社会教育施設における指定管理制度の導入が進んでいる。青少年自然の家は、これまでの少年自然の家における義務教育を対象とした児童生徒だけでなく、広く青少年育成を目的とした施設である。したがって、学校教育との連携という課題に対応するためには、青少年自然の家の教育的専門性とその力量の向上についてさらなる検討が必要である。平成29年公示の新学習指導要領のなかで「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」」の重要性が叫ばれる中、体験学習においてもその内実と質がより一層求められることになっている。今回の検討では、鹿児島における青少年育成についてであるが、社会状況や青少年の異年齢の幅の問題などによって大きく変化や、学校地域連携として教育課題の設定の再検討が必要であると言える。

注

¹ 今西幸蔵『社会教育計画ハンドブック』八千代出版、2004年、p.76。

² たとえば、近年では国立花山青少年自然の家「体験の風をおこそう(第27回)」国立青少年教育振興機構の取組ふれあい花山キャンプ:子供の貧困対策に係る取組」全国公民館連絡協議会『月刊公民館』2018年6月号、pp.38-40

³ 進藤哲也「自然体験に関わる指導者養成カリキュラムに関する調査研究」国立青少年教育振興機構『青少年教育研究センター紀要』創刊号、2011年、pp.30-31。